

児童心理療法に関する研究 (序報)

丹 下 庄 一

A Study on Child Psychotherapy

BY SHOICHI TANGE

児童相談室へ自分の子どもの問題について相談にくる親たちの多くは、心理療法についての知識をもっておらず、一度だけの面接で、相談室の専門家から問題の解決方法を教えてもらえるものと単純に考えている。その意味では、親は教えをうけるあるいは指導してもらうという受身的な姿勢にあり、子どもの問題を自分のものとしてひきうける心構えは、まだできていないのが普通である。

したがって、親から相談をうけた専門家が一回だけの面接でなく、継続面接あるいは心理療法の必要性があると判断した場合、まずその必要性について親に伝えるとともに、心理療法というものを、とくに子どもに対してなされる遊戯療法について説明しておく必要がある。遊戯療法という言葉は、しばしば誤解を招きやすいからである。親たちにとって、遊戯はレクリエーションを意味し、楽しむということである。それ故に、家でも公園でもよく遊んでいる子どもが何故相談室まで来て、遊びをしなくてはならないのかという疑問を親はもつ。Ginott⁽²⁾ は次のように簡単な説明をすればよいといっている。すなわち、決定をすること、独立心を得ること、建設的な方法で自分の感情や考えを表現することを学ぶために、子どもたちが遊戯時間を如何に使っているかということについてである。

専門家は、心理療法の必要性和相談室として継続面接をする用意のあることを親に告げるが、心理療法をうけるかどうかについての決定は、親がなすべきことであって、子どもに託されているのではない。その理由は、子どもについて責任をとっているのは、相談にやってきた親自身であり、またこのような重要な問題は、子どものうぶな精神で解決されるものではない。小さな子どもの場合、自分の能力を超えた事柄に関して、賢明な選択はできない。子どもに選択を許すことは、子ども自身の意志で治療を停止する権利を認めることにもなる。子どもはそのような特権は喜ばないし、自分を治療に委託することもなく、治療を継続するか停止するかをきめる責任もまたもっていない。子どもは大人の権威者が必要と思う限り、治療をうけ続けるのである。Ginott⁽²⁾ はこのような見解をはっきりと示している。

児童心理療法のあり方としては、子どものみが治療をうける場合、あるいは親のみがカウンセリングをうけることもあるが、これはごくまれなことであって、原則として、親子ともに心理療法をうけることになっている。

心理療法は、一般に治療をうける意欲のないものには効果はあまりあがらないといわれる。すなわち、来談者の動機づけが大きな意味をもつ。専門家が状態を見て異常であると判断しても、自分自身それほど異常であると思っていないもの、あるいは異常な状態に満足しているものは、治療を求める

意欲は少ないであろう。しかし、子どもの場合は、先にも述べたように、子ども自身の意欲の有無はあまり問題とならない。子どもは自ら治療を求めて来室することはまずないといってよく、多くは親に連れられてくるのである。むしろ、問題は親の方に意欲があるかどうかということになってくる。子どものことで非常に悩んでおり、不安定になっている自分を、まず何よりも何とかしたいと思っている親は、非常に意欲が強いといえる。それとは反対に、学校の教師にすすめられて一応来室したけれども、親自身さほどその子が問題であるとは思っていない、あるいは子どものことにはあまり関心をもっていない場合は、治療を継続しようとしてもなかなかやりにくい。また子どもが問題であることを認め、継続面接のために子どもとともに来室する親であっても、治療を受けるのは子どもであり自分はその付添いにすぎないと親自身が考えていることもある。

以上述べてきたような例において、直ちに親に治療にたいする意欲がないと判断してしまうことは危険である。というのは、心理療法の必要性ならびに心理治療というものについて、十分な理解ができていないためであり、治療者の働きかけ如何によっては、親の体験過程のなかに、意欲が目ざめてくることがある。そこで治療的面接における、治療者のあり方がまた働きかけ方が大へん大切になってくる。

Gendlin⁽⁴⁾もいうように、心理治療は一つの変化過程であり、治療経験は成長過程なのである。心理療法において、治療者とクライアントとの間に展開される人間関係は、日常生活におけるそれとは異なり、独特の特異なものである。それは、人間としてお互いの尊敬と尊重を基礎にして、きずき上げていく信頼関係であるといえる。クライアントは大人も子どもも、1人の人間としての自己を発見して、人格の変容や行動の変化を示し、人間関係における適応も可能となっていく。このような変化を起させているもの、心理治療たらしめているものは一体何であるのか。これらの問題は、何といっても専門家による治療実践とそれにもとづく研究によって、次第に明らかになっていくものである。現在の時点において考えられる治療的要因としては、

- (1) 治療者の要因
- (2) クライアント（児童心理療法の場合は、親と子ども）の要因
- (3) 治療関係（治療者とクライアントとの間における）

があげられる。児童心理療法におけるこれらの治療的要因を、筆者なりの実践と研究を通じて明らかにしつつあるが、それは次の機会にゆずりたい。

文 献

- (1) E. T. Gendlin, 村瀬孝雄訳: “体験過程と心理療法” 牧書店 (1966)
- (2) H. G. Ginott, 中村悦子訳: “児童集団心理療法” 新書館P101-104 (1965)
- (3) M. R. Haworth ed.: “Child Psychotherapy” Basic Books (1964)
- (4) C. E. Moustakas: “Psychotherapy with Children” Harper&Brothers (1959)